

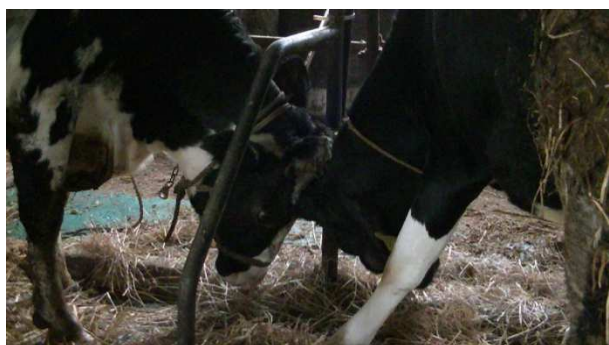
“人は嫁ぎ先で妊娠し 実家で分娩する”

”牛は実家で妊娠し 嫁ぎ先で分娩する”

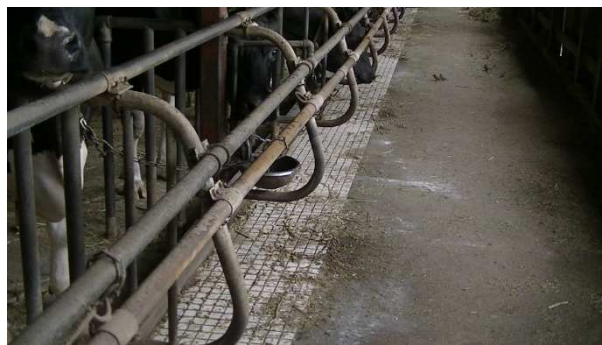
初妊牛の分娩前の状況を表現する私が作成した標語である。「人は嫁ぎ先で妊娠し、実家で分娩する。牛は実家で妊娠し、嫁ぎ先で分娩する。」 この標語の示す違いは何であろうか？

人間の場合、一般的に初産（人の場合は”ういざん”という）を迎える場合、実家に戻り分娩し、その後を過ごす。これは初めての分娩に対する不安やストレスを慣れ親しんだ実家で、そして分娩の先輩である母親の元で過ごすことで和らげている。ところが牛の場合には、実家で妊娠して分娩予定2ヶ月前に嫁ぎ先（購入先）に搬送される。餌も飼養環境も違う牛舎に入れられ、仲間の牛からはじめを受ける状態となる。この時期を栄養不足になることなく過ごさなければ、分娩後の病気が待ち受けている。

環境の大きな変化として、つなぎ飼養か放し飼い飼養かの区別がある。つなぎ飼養であれば、最低分娩前2ヶ月間はつながれる事に馴らさなくてはいけない。繋がれて寝起きすること、両隣のおばさん方に慣れること、ウオーターカップで水を飲むことなど、初妊牛にとって慣れるべき事柄は多い。これは短期間では行えず、2ヶ月の時間が必要である。これを短期間で行なうと、環境に不慣れなストレスに分娩時のストレスが重なり、更に初めての搾乳のストレスが上書きされて産後の病気に陥る。人の場合も、育児相談できる人や甘えられる人が近くにいないと、産後”うつ”が待ち構えるようになる。



つなぎ牛舎での隣同士の闘争



コンフォースタイルの改良例
下のバーを上に移動した

一方経産牛であっても、程度の差はあれども同じことがいえる。乾乳牛群に移動された経産牛新人は3から4日間は他の牛からいじめられる。このいじめの期間が採食不良と招き、栄養トラブルの引き金になる。特に乾乳後期群で頭数が多すぎる密飼いになると、この連鎖が起きる。乾乳後期の適正飼養密度は、ベッド数や連動スタンション数の80%位である。おなかの大きな乾乳後期牛は、探してまで採食しようとする意欲が低いので、簡単に探せる空席が必要である。

初産（ういざん）を経験した人の場合は、2人目、3人目の出産になると実家に帰るのではなく、実家の母親を自宅に呼び寄せられるようになる。分娩のストレスは経験により減少しているが、今度は先に生まれた子供の世話がある。生まれたばかりの子の世話と長子の世話が重なる。長子の世話を母親がみてくれると助かる。

このように人も牛も分娩前の環境と生活仕様は、産後の病気を防ぐ上で大変重要である。お嫁さんが分娩することを踏まえ、牛の分娩前の管理にあたって欲しい。



初妊牛と経産牛の体格の差が社会的強弱を作る



産褥牛のつなぎ方式を改良した例